

「伝統と現代」

(司会) 石井達朗

チョン・ビョンホ氏の基調講演のあと、私の司会で片岡康子氏と貫成人氏を交えてディスカッションをするという予定は聞いていたのだが、当日になってみると韓国側はビョンホ氏のほかに、評論家のイ・スンイェル氏と未来学会会長のソン・スナム氏もこのパネルに加わると聞いた。どういう経緯でこうなったかはわからないが、1時間半という時間のなかで、司会を含めて6名のパネリスト、しかもそのうちの3名が韓国人でその1人が通訳付きの基調講演をやるというのは、どう考えても無理だ（日本人のほうが時間に縛られすぎなのか）。この倍ぐらいの時間が必要である。なんとなく不安になったのだが、さらにその不安を倍加するように、ソン・スナム氏が伝統衣装を着て踊るというハプニングがあった。「伝統と現代」というタイトルが付いているから、韓国の伝統舞踊を見せてくださるといっただけなのに、ここでこういう展開になるとは誰も予想していなかった。恐らく本人も突発的に踊ることにしたのではないかと思う。

かなり遅れてシンポジウムがスタートしたうえに、チョン・ビョンホ氏の基調講演は、スライドを使い具体的な事柄に触れながら進行し、その民俗学的な該博な事例はあちこちに広がる一方である。時間に神経質にならなければならないのは、学会の座長や司会者のつね——講演のために準備をしてきてくださったビョンホ氏には気の毒と思いつつも、何度か時間のことを伝えたが、討論のための時間はほとんどとれないほどに縮小してしまった。これならビョンホ氏の単独の講演会にして、会場との質疑応答にしたほうがよかったのでは…とも思ったが、あとの祭りである。

ビョンホ氏はさまざまな伝統舞踊、民族的な祭祀の事例を引き合いに出しながら、日本と韓国の文化的な類似と相違に語った。例えば、日本の神社の巫女と韓国のクツを行なう巫堂（ムーダン）、韓国の農楽（ノンアク）と日本の田楽…など。私は以前、韓国の南の地域の二つの村で、韓国の研究者と共同調査で農楽をフィールドワークしたことがあるし、日本では和歌山県や静岡県で現存する数少ない田楽を見ている。ビョンホ氏は花笠などに両者の共通性があるという指摘をされたが、そのことには今まで気づかなかった。私が農楽を訪ねた韓国の二つの村の一方では、その儀礼はかろうじて傳承されているという状況であり、あと

何年か後には消えてしまうのではないかという危惧の念をもった。村の儀礼として消滅してしまったあとは、運がよければ「伝統的な遺産」として保存会などによって繼承されるという運命を辿るのだろう。韓国では、一部の学生が、男寺党（ナムサダン）・農楽・仮面劇（タルチュム）などの衰退しつつある伝統儀礼の保存に熱心であると聞いているが、実際はどうか。ビョンホ氏には、民俗学的な比較ばかりでなく、このような今の状況についても聞いてみたかった。

私が韓国のクツの場に何度も足を運び行くたびに感じていたことは、その融通無碍の精神である。概して、日本の祭りの場には、統制され、儀礼化され、形式化（よく言えば洗練）された印象があるが、韓国ではその場にいる者たちが神人一体となり酒を飲み踊り語りあう雰囲気がある。私のような異邦人が招かざる客としてその場にも、気軽に招き入れてくれる。例えば東海岸のある漁村ではクツ終わったあと野外のゴザのうえで酒宴にあずかったり、先に触れた農楽にいったときには農家の座敷に上がり昼も夜もご馳走になった。それがごく自然に当たり前に行なわれる。

ビョンホ氏の話のなかに、韓国人は現世主義者で人間が神をつくり神と一つになって祭るのだというのがあり、日本の仏教舞踊は純粹に宗教に基づいているのに対して、韓国では宗教のなかに人間的なものや芸術的なもの（これは「芸能的なもの」といったほうが適切だろう）が入りこんでいるという話を聞いて、はなはだ得心がいった。韓国の伝統文化に流れるこのような闊達な身体性は、この国の現代舞踊のなかにも脈々と流れている。良くも悪くもスタイリッシュなアイデアが先行しがちの日本の現代舞踊と韓国のそれとの交流は、互いに予期せぬ発見があるはずだ。発見というプロセスを経たあとでは、足が地についた本格的な共同の創造作業が始まるだろう。日韓の歴史、ワールドカップ共同開催、それに比べればあまりにマイナーでごくしゃくしていたがどうやら終わった二つの日韓舞踊学会…。願わくば、雨ふって、地固まる。